

佐久市の文化の現状と課題

1 佐久市の文化の土壌

本市は県下4つの平の一つである佐久平の中央に位置し、四方を浅間山、八ヶ岳、蓼科山、荒船山などの山々に囲まれ、中央を南北に千曲川が流れる豊かな自然に囲まれ、古くは先史時代から人の生活が営まれた地域であり、市内の各地に生活の痕跡が史跡として見つかっています。

佐久の地域性の一つとして、山々に囲まれ、寒暖の差が大きく厳しい自然の中、小さな集落を中心として、自主独立の精神が強く、地域を大切にする気風が育まれたとされています。

古代末には朝廷直轄の「官牧」が作られ、良質な牧草が茂るなどの良好な環境が、朝廷へ献上する良馬を育成し「望月の駒」と呼ばれたことから、地域の名前の由来となったと言われています。

近世には起伏に富んだ地形を高い技術と優れた工夫により「五郎兵衛用水」が築かれ、肥沃な大地に水をもたらし、その地域一体は美味しいお米の産地となりました。

また、幕末には学才見識ともにすぐれた藩主により、稜堡式築城法を採用した我が国に2つしかない星形稜堡の洋式城郭として「龍岡城五稜郭」が築城されました。

近代には擬洋風建築の「旧中込学校」が地域の人々の寄付により建設され、その中央の八角塔の天井には、子どもたちの目を海外に向けさせたいとの思いから、世界地図が描かれています。

このように、佐久には豊かな風土や貴重な文化財が残されるとともに、国の重要無形民俗文化財に指定されている「跡部の踊り念仏」を始めとした、いくつもの個性豊かな祭りや伝統行事が、各地に受け継がれています。



旧中込学校



跡部の踊り念仏

2 文化芸術活動の現状と課題

現在、市内で様々な文化芸術に関する活動が行われていますが、その多くは文化芸術活動に夢や希望、情熱を持った人たちに支えられています。

これらの人たちが集まり、お互いに刺激し合うことは、文化芸術活動の活性化となり、多くの人の文化芸術活動を生み出しています。

◆活動や鑑賞の現状

平成23年8月～10月にかけて行った、佐久市の文化についてのアンケートは、対象を市内に在住する20歳以上の市民から無作為に1500人を抽出依頼し、869人(57.9%)の方から回答をいただきました。

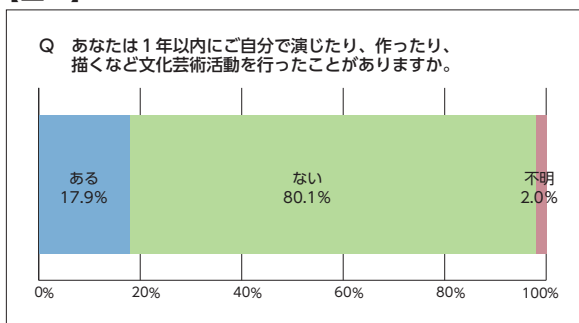
この中で、1年以内の文化芸術に関し、その活動や鑑賞について尋ねた結果、活動を行っていないと回答した人は80.1%【図1】、1年以内に自宅以外で有料の文化芸術を鑑賞しない人も53.4%【図2】となり、それぞれ、行わない・鑑賞しない人が半数を上回る結果となりました。

また、実際に文化芸術活動を行っている人に活動している場所を尋ねたところ、63.5%【図3】の人が自分の住む地区内で活動していると回答しており、多くの文化芸術活動が身近な場所で行われている結果となりました。

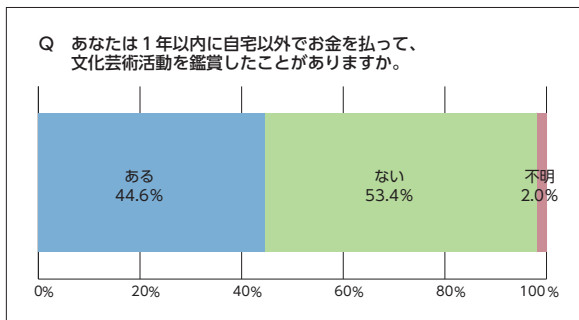
これらの「活動しない(鑑賞しない)」理由【図4・図5】としては「時間的に余裕がない」との回答が双方とも最も多く、「参加したい活動の時間が合わない」や「鑑賞したい催し物の開催時間と自分の予定が合わない」と合わせ、多くの人が時間的な理由を挙げています。

また、その他の回答として、「文化芸術に興味がない」や、「鑑賞・参加したい催しが

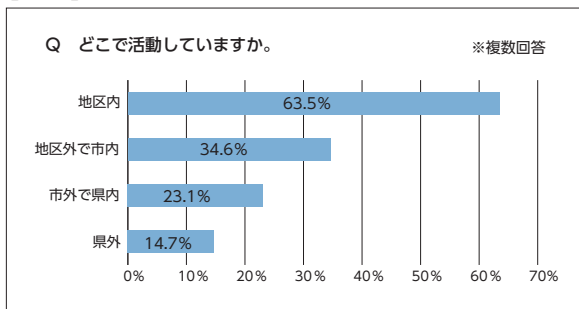
【図1】



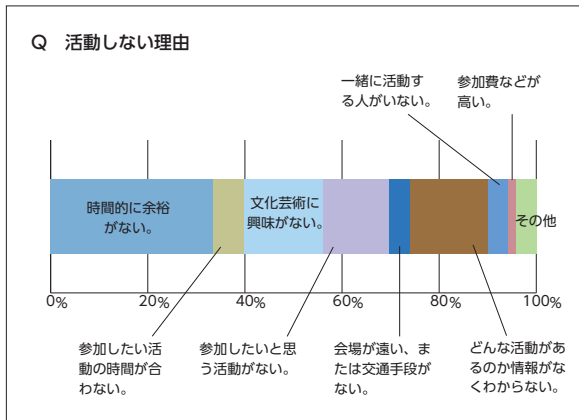
【図2】



【図3】



【図4】



ない] など、文化芸術に対するモチベーションや催し物に対する興味を理由とする回答が多くありました。

このように、文化芸術の活性化を図るうえで、時間的に参加しやすい工夫やモチベーションの向上・市民のニーズに合った催し物の企画などが課題と考えられます。

一方、活動している人の多くは身近な施設で活動を行っており、様々な種類の教室や、多くのグループ活動を行っている公民館活動は、文化芸術の推進を図るうえで大切な部分を担っていると考えられます。

◆市民の意識

同じアンケートにおいて「佐久市は文化・芸術が盛んなまちと感じていますか」の設問に、72.5%【図6】の人が「思わない」と回答しています。

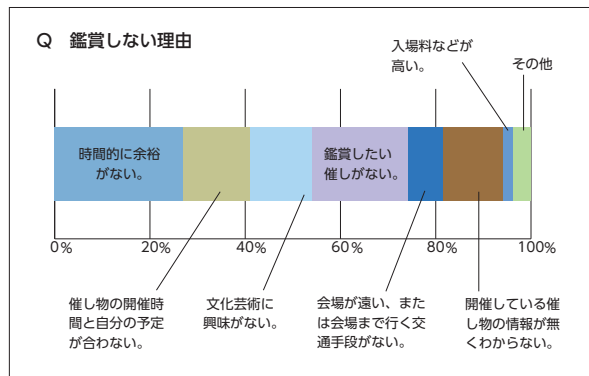
思わない理由としては「文化活動の情報が身近になく、分からない」と、「市内で芸術的に優れた公演が行われることが少ない」の回答が多く、双方を合わせると思わない人の70.1%【図7】となり、市民が文化芸術の盛んなまちと感じるには情報や芸術性の高い公演の開催が不足していると感じている人が多い結果となりました。

一方、「今後の文化振興に大切だと思うことは」の問いに62.4%【図8】の人が「多くの人が気軽に参加できる文化芸術活動の企画・開催」と回答しています。

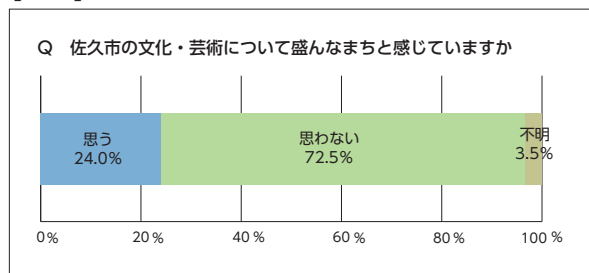
このため、文化芸術活動へ

多くの人が参加することで、文化の振興が図られると考えており、「気軽に参加できる」をキーワードに幅広い意見を聞き、文化芸術の施策を計画するとともにその計画を広く市民へ伝える必要があると考えられます。

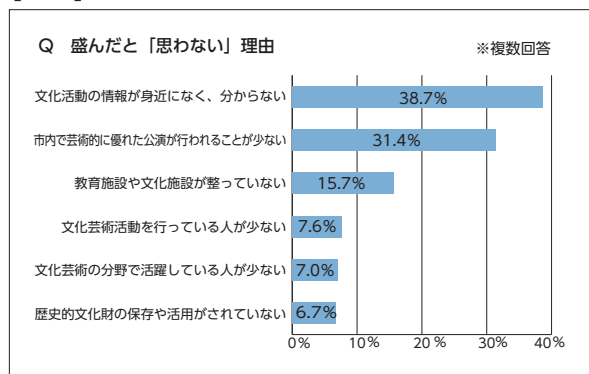
【図5】



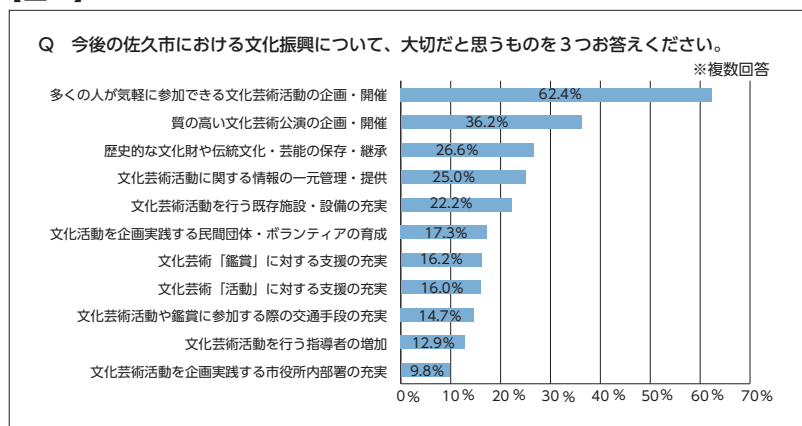
【図6】



【図7】



【図8】



3 既存文化施設の現状と課題

佐久市の文化施設は地域の歴史と伝統を背景に建設されており、合併によりそれぞれの特色をもつ施設が各地に点在する形となりました。

また、本市における文化振興の方向の一つに、佐久市総合文化会館の建設が計画されていましたが、「佐久市総合文化会館建設の是非を問う住民投票」の結果、建設が中止となりました。

◆施設の利用状況

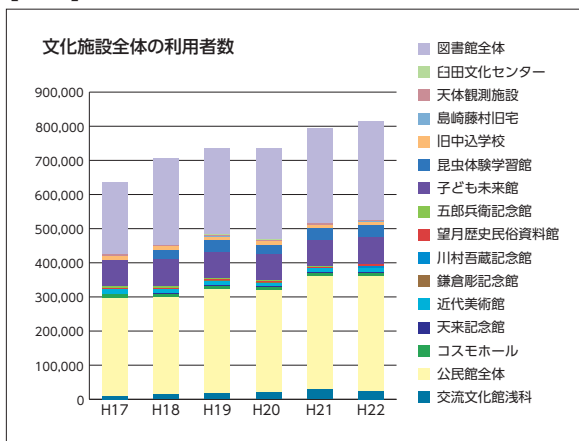
文化施設の利用状況は、全体としては利用者が増加【図 9】しています。図書館・子ども未来館をはじめとする学習系の施設【図 10】やコスモホール・公民館活動を中心とした貸館系の施設【図 11】の利用者数は平成 17 年度以降、概ね毎年利用者数が増加しています。

また、鑑賞を中心とした美術館系施設【図 12】は平成 21 年度まで減少傾向にありましたが、平成 22 年度に新しい企画展の開催や、川村吾蔵記念館が新しく開館するなど、すべての施設で入館者が増えました。

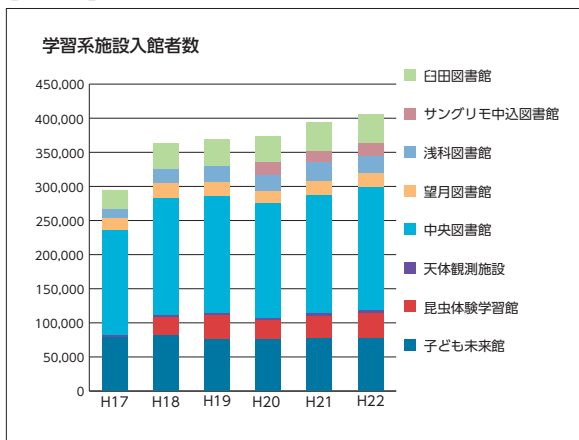
一方、博物館系の施設【図 13】では各施設とも平成 22 年度は大きく入館者数が減少し、なかでも臼田文化センターは主な収蔵品を川村吾蔵記念館へ移したため、利用者が減少しているため、施設の活用について検討が必要となっています。

これらの現状から、施設の有効活用には市民のニーズに応じた講座や教室・企画展など内容を工夫するとともに、他の施設と連携した取り組みを行うなど、施設の新しい魅力の発信が必要と考えられます。

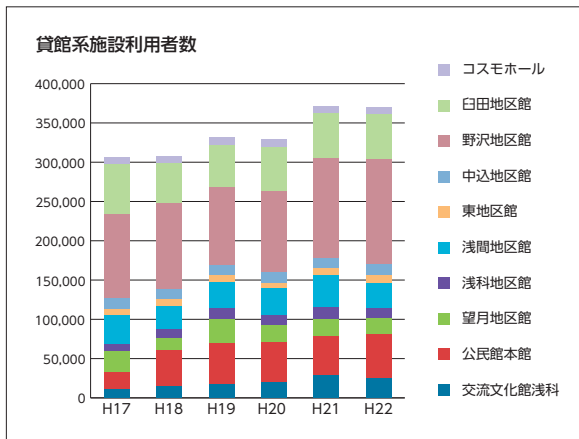
【図 9】



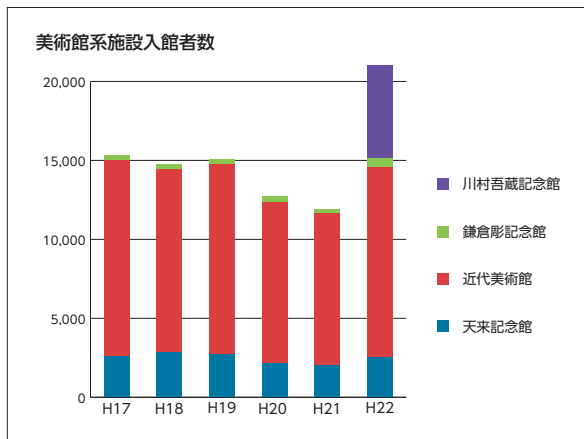
【図 10】



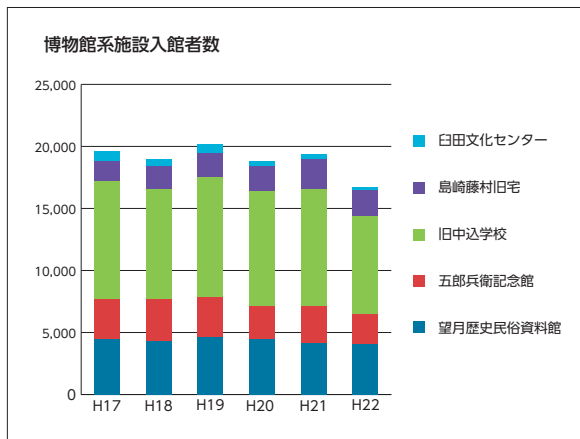
【図 11】



【図 12】



【図 13】



◆施設の老朽化

文化芸術に関する施設には、経年による施設や設備の老朽化などが目立つようになり、大規模な改修や修繕・建て替えなどが必要な施設もあります。

このため、施設の利用状況や役割、今後の位置づけなどを総合的に勘案し、既存施設の活用と統廃合も含めた検討をすると共に、施設の特徴を生かした管理運営を行うため、その方法についても見直しが必要となっています。



佐久市立近代美術館



天来記念館



交流文化館浅科



コスモホール